

バックカントリースキーで あわや遭難

江別医師会
成田整形外科

成 田 豊

開業して間もない頃、しばらく遠ざかっていたスキーに誘われて、1月にしては珍しく晴れたある日、手稲ハイランドスキー場に行ってみました。素晴らしいパウダースノーが私を出迎えてくれて、久しく忘れていたウインタースポーツの開放感を味わうことができました。

それからというもの、俄然スキー熱が湧き上がり、シーズン会員となってゲレンデ通いが始まりました。最初はリフト脇の未圧雪の場所をできるだけ速く木々の間をぬって滑ることに喜びを感じていました。そしてほどなく、より深く、より急で難しい斜面を滑り降りたいという欲求にかられるようになっていき、自然とコース外に出ることが多くなりました。

そんなとき、知人から山スキーに誘われました。山に入るための道具を一式揃え、バックカントリースキーを始めることになりました。初めて連れて行ってもらったのは手稲山の麓でした。リフトを使わず自分の足で登り、滑り降りることはゲレンデスキーとまた違った趣と感動があり、一瞬にしてパウダースノーの虜になってしまいました。

それからというもの、週末にはかかさず山に出掛けるようになりました。冬の山にはリスクはつきもので、特に雪崩による遭難は命を失うことになりかねないので、リスク回避のための知識を付け、十分な装備を持ち、レスキュー訓練にも参加したりしました。そして数年が経過し山スキー仲間にも恵まれ、道内のいろいろな山を経験し、白い粉の虜になっていきました。

そんなとき、あの事故を起こしてしまいました。それは平成15年3月1日、羊蹄山の真狩コースと言われるルートを4人のパーティーで行動している時でした。天候は晴れ、風やや強く、この時期にしては気温が高く、湿った重い新雪の雪面でした。標高1,200M付近から滑走を始め、最初に2人が広いオープンバーンを滑り降りて樹林帯の手前で停止していました。ついで私が滑走を始めました、思いのほかよく走る雪で、スピードがどんどん上がっていきます。やがて見通しの良いオープンバーンが切れ、急に落ち込む樹林帯が視界に入ってきました。そこで一度止まって、この先の安全確認をすべきポイントでしたが、スピードが上がっていたのと重たい深

雪のために停止することができず、十分減速しないまま狭く急な斜面に入ってしまった。そこで慌てて減速を試みたところ、右のスキーが乱れて先端が突き刺さり転倒。不運なことに金具の開放機能が作動せず、右足関節に奇妙な違和感が起こりました。なんとか起き上がってみましたが、足を痛めてしまい行動不能になってしまいました。場所は羊蹄山の奥深い山中でした。さてどうしたものか。時刻は13時、日没までには十分時間がある。救助要請すれば、この天候ならヘリが来てくれそうだ。しかし遭難として報道されてしまうな…。バックカントリースキーで遭難し無事救助されたのはいいが、その後記者会見に引っ張り出されて恥をかき姿が頭をよぎります。それは何としてでも避けたい思いで、自力で下山する決断をしました。履いていたスキー板をストック、ゴムバンド、ザイルで結合し簡易そりにして引っぱり、登る箇所は後ろ向きに這い上がって、なんとか下山することができました(写真)。

車中から整形外科病院勤務の友人に緊急コール、無理を言ってそのまま入院させていただき、無事報道されることなく生還することができました。診断は「右足関節脱臼骨折」。手術、ギプス固定を受けて数日で退院し復職することができました。その後もまた山に行きたい一心で懸命にリハビリを行って、今シーズンも20数回の山行を楽しむことができました。

厳冬期の山中で行動不能になるということは、ひとつ条件が悪ければ自分は言うにおよばず、仲間の命さえも奪いかねない重大インシデントです。技術と経験、知識が豊富な仲間が複数いてくれたこと、気象条件が良かったことで自力救助が可能であったと思われま。今回、スピードの出し過ぎという私の慢心、過信からあわや遭難騒ぎという大変な事故を起こしてしまいました。幸い救助要請せずには済みましたが、クリニックの診療を維持するために各方面に多大なご迷惑をお掛けしてしまいました。ここに感謝の気持ちをお伝えするとともに深く反省し、同じ過ちを起こさぬように誓います。

